

学位論文要約

青年期における社会的自己の多面性と
アイデンティティに関する研究

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻(心理学分野)

木谷智子

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

- 第 1 節 Erikson のアイデンティティ理論における自己の多面性
- 第 2 節 多面的な自己を持つ青年
- 第 3 節 社会的変化と多面的な自己
- 第 4 節 現代社会におけるアイデンティティ
- 第 5 節 本研究の目的

第 2 章 自己の多面性と精神的健康, 心理的 well-being との関連

- 第 1 節 自己の多面性, アイデンティティ, 精神的健康の関連
(研究 1-1)
- 第 2 節 自己の多面性と心理的 well-being の関連(研究 1-2)

第 3 章 自己の変化意識による青年の類型

- 第 1 節 変化意識による青年の類型(研究 2-1)
- 第 2 節 青年の類型別に見たアイデンティティ感覚の特徴(研究 2-2)

第 4 章 現代青年のアイデンティティに関する質的検討(研究 3)

第 5 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 本研究の限界および今後の課題

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 Erikson のアイデンティティ理論における自己の多面性

青年期は、幼児期からの複数の自己を統合し、一貫したアイデンティティを形成する時期である(Erikson, 1959)。アイデンティティとは、斉一性・連続性を持った自分自身が社会において認められているという感覚であり、アイデンティティの確立には自己の斉一性・連続性と心理社会的同一性の双方の確立が含まれる(Erikson, 1959)。そして、それら 2 つの同一性の確立は、役割実験を通して社会的適所を見つけることによって可能となる(Erikson, 1959)。役割実験を行う中では一時的に役割に応じて多様な自己を持つことになるが、多様な自己は、アイデンティティの拡散を引き起こす(Erikson, 1959)。

一方、Block(1961)や Donahue, Robins, Roberts, & John(1993)は自己の多面性を社会的な役割に応じて性格特性が異なっている程度から測定した。その結果、自己の多面性は抑うつ、不安、神経症傾向など精神的健康の低さと関連することが示されている。それについて Block(1961)は、自己の多面性が、アイデンティティの感覚を混乱させるために、抑うつに結びつくと考察している。

第 2 節 多面的な自己を持つ青年

しかし現代では、状況や関係性において異なる多様な自己を統合せず、多面的な自己を持つ青年が多く指摘されている(川上, 2013; 成田, 2001; 高石, 2009)。Erikson のアイデンティティ論では、多面的な自己は葛藤を経験した後に統合されていくとされたが、現代の青年は、多面的な自己に葛藤すらない点が特徴的である。自己を統合せず、多面的な自己を持つ在り方は、アイデンティティの未確立や放棄、それに伴う主体性や自律性の未熟さ、あるいは自己の分裂や解離といった心理的な問題と

して捉えられる(川上, 2013 ; 桐山, 2010 ; 高石, 2009)。

第 3 節 社会的変化と多面的な自己

一方で, 多面的な自己を持つ青年は, 現代社会に適応した在り方と捉えられる場合もある。今日, 青年が関わる場や, その場で担う社会的役割は多様化し, 半強制的に多様な役割を与えられる(Gergen,1991)。多様な社会場面に関わる際には, 自己の多面性は, 社会的不安を低減させる(Lennox & Wolfe, 1984), 社会的なストレスを緩和することが示されている(Linville, 1987 ; Smith & Cohen, 1993)。社会への適応を考えると, 多様な場に関わらなければならない現代社会においては, 一貫した自己を保つよりも, 場や関係性に合わせて自己を変化させる在り方が適応的とする見方もある(浅野,1999; 岩田,2006; 辻, 2004)。

第 4 節 現代社会におけるアイデンティティ

現代社会において, 自己の多面性は, 社会適応のために必要であるとされるが(浅野, 1999 ; 岩田, 2006 ; 辻, 2004), 一方で, 自己の多面性は, アイデンティティの未確立, それに伴う主体性, 自律性の未熟さと結びつくとされる(川上, 2013 ; 桐山, 2010 ; 高石, 2009)。

しかし, 浅野(1999)や辻(2004)は多面的な自己を持つ青年を, アイデンティティが未発達な状態ではなく, 場面によって異なる自己はすべて本当の自分である, 多元的なアイデンティティを有していると捉えている。辻(2004) は, 現代青年の多様な対人関係の持ち方から, 以下のような自我構造のモデルを作成している(Figure 1)。まず, Figure 1 の (a) のように, 自己を一貫した自己に統合するような自我構造を仮定すると, 「本当の自分」を表す円の中心部分は 1 つである。そのため, 関係性や集団によって自己が変化する場合, それはどちらかが親密な付き合いを, そしてどちらかが表層的で希薄な関係を意味することとなる。一方で,

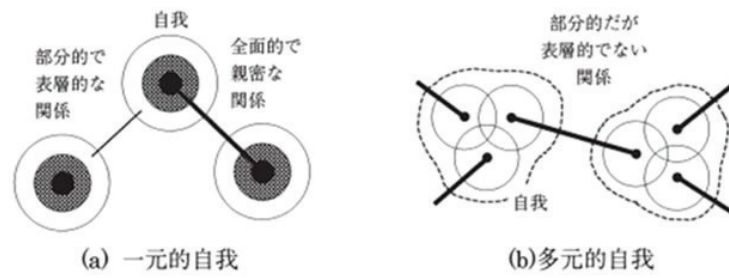


Figure 1. 自我構造の2つの模式図(辻, 2004)

(b)複数の自己を統合しない自我構造を仮定すると、場面によって自己が変化したとしても、すべて本当の自分であるため、葛藤が生じない。多面的な自己を持つ青年は、すべてを多面的な自己を自分らしいと感じる多元的なアイデンティティを有していると考察されている(辻, 2004)。これらのモデルは仮説モデルにとどまっており、実証的な研究はほとんど行われていない。

本研究では、Figure1(b)のモデルのように、異なる自己を統合せず、複数のアイデンティティを有する在り方を、多元的アイデンティティと定義する。また、Erikson(1959)が述べた、役割間で自己が統合された、一貫性のあるアイデンティティを一元的アイデンティティと定義する。

第5節 本研究の目的

社会の変化に伴い、多面的な自己を併存させるという在り方が指摘されているが、アイデンティティ論からの実証的な研究はほとんど行われていない。

本研究においては、多面的な自己を有する青年の検討を行う前に、自己の多面性が青年に与える影響について再検討を行うこととする。自己の多面性は、アイデンティティを混乱させ(Block, 1961)、主体性や自律性の乏しさと結びつく(高石, 2009)とされている。しかし、先行研究は、自己の多面性と精神的健康の関連しか見ておらず(Block, 1961)、それが

アイデンティティを媒介するかどうかは明らかになっていない。また、自己の多面性が主体性や自律性の乏しさと結びつくという示唆も、理論的考察に留まり、実証的な研究はなされていない。

よって、まず研究1において、自己の多面性がアイデンティティを媒介して抑うつに与える影響(研究1-1)と、自律性を始めとする心理的機能に与える影響について再度検討を行う(研究1-2)。その上で、自己の多面性が抑うつに結びつかない青年が存在するかどうかをクラスタ分析によって検討し(研究2)、自己の多面性が抑うつに結びつかない青年は多元的アイデンティティを有しているのかどうかについて検討を行う(研究3)

第2章 自己の多面性と精神的健康、心理的 well-being との関連

第1節 自己の多面性、アイデンティティ、精神的健康の関連(研究1-1)

目的 現代社会においても、自己の多面性がアイデンティティを混乱させ、精神的健康の低さと結びつくかを明らかにするために、自己の多面性とアイデンティティ、精神的健康の関連を検討する。

方法 対象者 大学生167名(男性99名、女性68名、平均年齢19.4歳)に質問紙調査を行った。**調査項目** (1)自己の多面性：特性語分類課題。対象者に自分が関わっている社会的活動や社会的役割を記入させ、それぞれの活動や役割における性格特性を尋ねるものである。活動や役割に応じて自己の性格特性が異なっているほど多面性の得点は高くなる。(2)アイデンティティ：多次元自我同一性尺度(MEIS)(谷, 2001)、自己斉一性・連続性、心理社会的同一性、対自的同一性、対他的同一性の4因子、20項目、(3)精神的健康：改訂版大学生用ストレス自己評価尺度の抑うつ情動的尺度(以下、抑うつ尺度)(尾関, 1993)、1因子5項目。

結果 自己の多面性得点が、MEISの各下位因子を媒介して、抑うつに寄与するという仮説モデルを立て、構造方程式モデリングを行った。自

己の多面性から自己斉一性・連続性に有意な負のパスが見られ($\beta = -.18, p < .05$), 自己斉一性・連続性から抑うつに有意な負のパスが見られた($\beta = -.40, p < .01$)。

考察 己の多面性は、斉一性・連続性を混乱させ、精神的健康の低さと結びつくと考えられる。

第2節 己の多面性と心理的 well-being の関連(研究 1-2)

目的 己の多面性と心理的 well-being の関連を検討する。心理的 well-being (Ryff, 1989)は、人格発達や社会的成長に必要な人生全般にわたるポジティブな心理的機能を示す。多面的な自己を持つ青年が自律性に乏しいのであれば、己の多面性は心理的 well-being 尺度の自律性の低さと関連すると考えられる。

方法 対象者 大学生 212 名 (男性 97 名, 女性 115 名, 平均年齢 19.8 歳)に質問紙調査を行った。**調査項目** (1)己の多面性: 特性語分類課題, (2)心理的 well-being: 心理的 well-being 尺度(西田, 2000), 人格的成長, 人生における目的, 自己受容, 自律性, 環境制御力, 積極的な他者関係, 6 因子, 43 項目。

結果 己の多面性と心理的 well-being 尺度の相関分析の結果, 己の多面性は, 人格的成長, 人生における目的の 2 つの因子とのみ, 弱い正の相関が見られた($r = .17, p < .05; r = .16, p < .05$)。

考察 己の多面性と自律性には関連が見られず, 己の多面性は, 自律性の低さとは直接関連しないと考えられる。

第3章 己の変化意識による青年の類型

第1節 変化意識による青年の類型(研究 2-1)

目的 己の多面性を持ちつつ, 精神的健康の高さを有する青年が存在するという仮説を検証する。

方法 対象者 大学生 260 名 (男性 104 名, 女性 154 名, 不明 2 名, 平均年齢 20.9 歳)に質問紙調査を行った。**調査項目** (1)自己の変化意識: 自己複数性尺度(岩田, 2006), 1 因子, 4 項目。主観的な変化意識を捉える尺度である。(2)精神的健康: 抑うつ尺度 (尾関, 1993), 1 因子, 5 項目。

結果 自己複数性得点, 抑うつ得点を標準化し, k-means 法によるクラスタ分析を行い, 3 クラスタを採用した(Figure 2)。クラスタを独立変数とし, 自己複数性と抑うつを従属変数とする一元配置分散分析を行った (Table 1)。クラスタ 1 (78 名) を抑うつ・変化群とした。クラスタ 2(121 名)は自己の変化が抑うつに結び付いておらず, 多面的な自己を有している点が特徴である。よって多面的自己群と命名した。クラスタ 3(61 名)は, 場面によって, 自己が変化せず, 自己が一貫している群であると考えられる。よって自己一貫群と命名した。

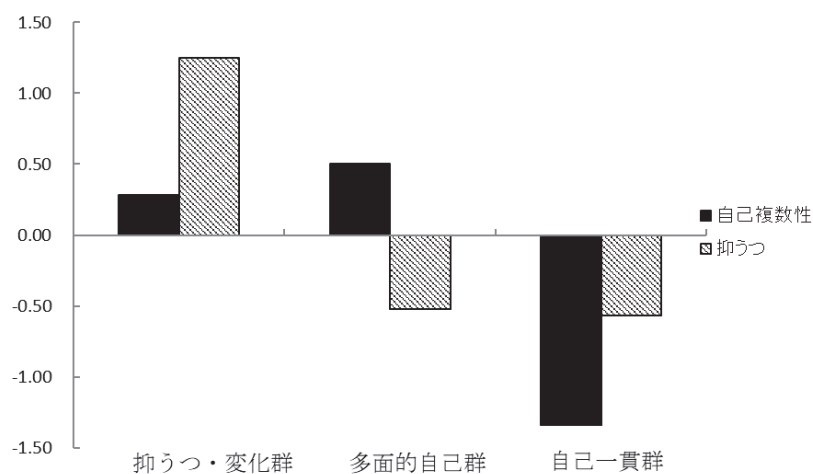


Figure 2 変化意識と精神的健康による類型

Table 1 各クラスタの自己複数性得点, 抑うつ得点の平均値

	1.抑うつ・変化群 (n=78)	2. 多面的自己群 (n=121)	3. 自己一貫群 (n=61)	F 値	
自己複数性	3.02 (0.51)	3.17 (0.43)	1.89 (0.46)	166.56	3 < 1, 2** , 1 < 2 *
抑うつ	3.63 (0.63)	1.82 (0.50)	1.76 (0.69)	262.03	2, 3 < 1**

()内は標準偏差 $p < .05^*$, $p < .01^{**}$

考察 クラスタ分析において, 自己複数性が高く, 抑うつの低い青年(多

面的自己群)が見られたことから、自己の多面性が抑うつに結びつかない青年が存在していると考えられる。

第2節 青年の類型別に見たアイデンティティ感覚の特徴(研究 2-2)

目的 多面的でありつつも、精神的健康を保っている青年(多面的自己群)のアイデンティティの特徴を明らかにするために、研究 2-1 で見られたクラスタ間でアイデンティティ得点の差異を検討する。

方法 研究 2-1 の質問紙調査と同時に行った。**調査項目** 研究 2-1 の質問項目に加え、アイデンティティの指標として MEIS(谷, 2001)を用いた。

結果 各クラスタを独立変数、MEIS の下位因子得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った(Table 2)。多面的自己群の青年は自己一貫群の青年に比べ、自己斉一性・連続性の得点は低いが心理社会的同一性の得点は、同様に高かった。

Table 2 各クラスタのアイデンティティ得点

	1.抑うつ・変化群 (n=78)	2. 多面的自己群 (n=121)	3. 自己一貫群 (n=61)	F 値	
自己斉一性・連続性	20.60 (6.73)	23.98 (6.58)	26.49 (5.30)	15.27	1<2, 3** 2<3*
心理社会的同一性	20.23(5.92)	22.11(5.04)	23.69(4.98)	7.42	1<2* 1<3**

()内は標準偏差 $p < .05^*$, $p < .01^{**}$

考察 自己の多面性を持ちつつも、それが抑うつに結び付かない青年(多面的自己群)は、抑うつ・変化群以上の斉一性・連続性の感覚と、一貫群同様の心理社会的同一性の感覚を有していると考えられる。

第4章 現代青年のアイデンティティに関する質的検討(研究 3)

目的 研究 2-1 において抽出された 3 つのクラスタの特徴を質的に検討する。自己の多面性が精神的健康の低さと結びつかない理由を、変化理由や、アイデンティティの差異から検討する。

方法 対象者 研究 2-1 で面接調査の協力を得られた 19 名に対し、面接調査を行った。対象者のクラスタは、自己一貫群 6 名(A~F)、多面的自

己群 8 名(G~N), 抑うつ・変化群 5 名(O~S)であった。面接手続き 対象者に自らが関わっている場や活動を尋ねた。その後, 各場面における自分がどのような人間かについて尋ねた後, 改めて場面によって自己が変化しているか(自己の性格特性が変化しているか)を尋ねた(分析 1)。自己が変化していると答えた者に対しては, 自己の変化の特徴を検討するために, ①変化理由, ②変化への評価, ③それぞれの場における自己感覚, ④本当の自分のイメージを尋ねた(分析 2)。

分析 1 自己の多面性を有りと答えた者は, 自己一貫群 6 名中 4 名, 多面的自己群 8 名中 8 名, 抑うつ・変化群 5 名中 5 名であった。主観的な変化意識が低い自己一貫群においても, 場面間で性格特性が異なっているものが半数以上見られた。

分析 2 佐藤(2008)の定性的コーディングの演繹的アプローチを参考に行った。①~④の質問に対する語りを抽出し, 内容別に要約した。要約後に, 類似した内容の語りを集めてグルーピングを行った。それぞれの語りの内容に共通する特徴をカテゴリ名とし, 各カテゴリの定義を作成した。①は 4 つ, ②は 5 つ, ③は 5 つ, ④4 つのカテゴリが見られた。カテゴリの信頼性を検討するため, 大学院生 1 名が定義をもとに分類を行い, 評定者間での一致率を求めた。一致率はすべて 80%以上であり, 一致しなかった項目については協議の上, 分類を行った。

結果と考察 自己一貫群, 多面的自己群, 抑うつ・変化群の群に見られたカテゴリを Table 3 に示した。またそれぞれそれぞれの群のアイデンティティの特徴について, Table 3 に見られたカテゴリをもとに考察を行った。

自己一貫群 自己一貫群は, 自己を変化させない群であると考えられたが, 分析 1 の結果から自己の性格特性が異なっているものが半数以上見られた。彼らは, 自らが自分らしくいられる場所を選択し, 重要な他者

Table 3 各群に特徴的なカテゴリ(該当者)

	自己一貫群	該当者	多面的自己群	該当者	抑うつ・変化群	該当者
①変化理由	親しさの程度による自己表出の選択	ABCDEF	求められる役割への対応 目的に応じた部分的な自己表出	GHIKLMN HJKN	求められる役割への対応	OPQS
②変化への評価	自分らしさの維持	ABCDEF	社会適応への必要性 自己の可能性の発見	GHIKLM GJN	自己の偽り 自分のなさ	OQS PR
③自己感覚	素の自分での感覚	ABCDEF	素の自分での感覚 疲れの感覚 変化を楽しむ感覚	HIJKML GKMN GHJN	自己違和感 疲れの感覚	OPS OQRS
④本当の自分イメージ	一元的な自己	ABCDE	多元的な自己 一元的と多元的の混合	GHIJMN KL	一元的な自己 不明瞭な自己	OQS PR

※ 表中のアルファベットは対象者IDを示す

との関係の中でアイデンティティを形成している。つまり Erikson(1959)が述べたように、役割実験における適所の選択を行い、適所を選択することで、一元的なアイデンティティを形成していると考えられる。

多面的自己群 多面的自己群は、社会的要請に応じて、社会に適応する形で自己を変化させる点が特徴的であった。自己一貫群と異なり、多様な場を自らの適所として認識し、主体的に自己を変化させることによって、社会的な同一性を確立していると考えられる。場面ごとの自分についてそれぞれ、自分らしさを感じており、辻(2004)が示すような多元的アイデンティティを有していると考えられる。

抑うつ・変化群 多面的自己群と同様に、社会的要請に応じて自己を変化させていた。しかし、本当の自分は一つであるという認識があるために、多面的な自己が葛藤を生じさせ、アイデンティティ拡散の特徴を示していると考えられる。

第5章 総合考察

第1節 本研究の成果

本研究の成果は、多面的自己群の特徴を示した点である。彼らの斉一性・連続性の感覚は一貫した自己を持つ青年に比べ乏しいものの、心理

社会的な同一性の感覚は十分に得ており(研究 2-2)、また、多様化した社会に合わせるために主体的に自己を変化させていた(研究 3)。さらに、多面的自己群の青年は、それぞれの場面において自分らしさを感じていることが示され、彼らは多元的なアイデンティティを有していると考えられる。つまり、自己の多面性を持ちつつも、抑うつ的にならない青年は、アイデンティティ形成の放棄と捉えるよりも、現代社会に応じた多元的アイデンティティを形成していると捉えるのが適切である。

また、多元的アイデンティティを持つ青年とアイデンティティが拡散している青年(抑うつ・変化群)の特徴の相違は、本当の自分イメージにおいて見られた。これらの結果から、自己を統合できず、抑うつ的になっている青年への支援として、本当の自分イメージを変容させるという臨床的、教育的支援の可能性が示唆された。

第 2 節 本研究の限界および今後の課題

本研究の限界および今後の課題は以下の 4 点である。第一に研究 3 における人数の問題が挙げられる。研究 3 では、人数の少なさゆえに量的な分析を行うことが困難であり、現時点では一般化は難しいと考えられる。第二に、学年差を考慮できなかった点が挙げられる。アイデンティティの得点は学年が上がるほど高くなり(谷, 2001)、自己の多面性も、学年が上がるにつれて活動の幅が広がるほど大きくなると予想される。よって今後は学年による差を考慮したうえで検討を行う必要がある。第三に、本研究では多面的自己群の青年を新たなアイデンティティの在り方として示したが、青年のアイデンティティの状態を一時点で捉えるにとどまっている。青年期におけるもっとも大きな危機は職業選択における危機であり、職業選択の際に、多様な自己が葛藤を生じさせるのかについて、縦断的に検討を行う必要がある。第四に、多面的自己群と自己一

貫群の青年のアイデンティティ形成プロセスの差異の検討である。本研究においては、一時点における測定のため、一元的なアイデンティティを形成するのか、多元的なアイデンティティを形成するかの方向性が、どの時点で決定されるのか、その差異は明らかに出来なかった。この点に関しては、他者関係の持ち方や、社会の認識の質的な差異が推測される。今後は、他者関係や社会認識など、より多角的な視点から多元的アイデンティティの特徴を検討していく必要がある。

引用文献

- 浅野智彦 (1999). 親密性の新しい形へ. 富田英典・藤田正之(編) みんな
ぼっちの世界——若者たちの東京・神戸 90's 展開編—— (pp.41-57)
恒星社厚生閣
- Block, J. (1961). Ego identity, role variability and adjustment *Journal of Consulting Psychology*, **25**, 392-397.
- Donahue, E. M., Robins, R.W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993) . The divided self : Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 834-846.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : W.W. Norton
(エリクソン, E.H. 西平 直・中島由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gergen, K. J.(1991). *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. New York: Basic Books.
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦

(編). 検証・若者の変貌——失われた 10 年の後に—— (pp.151-190)

勁草書房

川上華代 (2013). 現代学生の特徴と学生相談についての一考察——問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から見えてくるもの——和光大学現代人間学部紀要, **6**, 141-153.

桐山雅子 (2010). 現代学生の心理的特徴 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編). 学生相談ハンドブック (pp.30-34) 学苑社

Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.

Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 663-676.

成田善弘 (2001). 若者の精神病理——ここ 20 年の特徴と変化—— 岩波新書

西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理 well-being に関する研究 教育心理学研究, **48**, 433-443.

尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂——トランスアクションナルな分析にむけて—— 久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 99-114.

Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? : Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.

佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法 —— 原理・方法・実践 —— 新曜社

Smith, H.S., & Cohen, L.H. (1993). Self-complexity and reactions to a relationship break up. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **12**, 367-

394.

- 高石恭子 (2009). 現代学生の心の育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, **15**, 79-88.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 辻 大介 (2004). 若者の親子・友人関係とアイデンティティ——16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から—— 関西大学社会学部紀要, **35**, 147-159.